

## 報告

## オンライン・ブックシェルフ

## ジェンダーの視点で見る戦争—女性・平和・安全保障

田中 雅子

2020年、ジェンダーについて取り上げた初の国連安全保障理事会決議である第1325号(UNSCR1325)「女性・平和・安全保障」(Women, Peace, and Security: WPS)の採択から20年という節目の年であった。UNSCR1325は、それまで人権分野でしか取り上げられなかった武力紛争下の性暴力を安全保障分野で扱う転換点となった国際規範である。平和構築における女性の役割を再確認し、紛争予防と解決に関わる意思決定に女性の参加を拡大させることを求めたこの規範が採択されるまでには、日本軍性奴隷制度のサバイバーなど戦時性暴力の被害にあった女性たちの勇気ある証言や、紛争予防や解決に取り組んだ女性たちによる長年にわたる草の根の実践があった。新型コロナウイルス感染症の世界的な拡大により、大規模な国際会議は開かれなかったが、国連機関や平和運動に関わる女性団体は、9月から11月にかけて、WPSに関する多くのオンラインイベントを開催した<sup>1</sup>。

上智大学グローバル・コンサーン研究所(IGC)は、2014年より「ジェンダー暴力と闘う16日間キャンペーン」(11月25日から12月10日)にあわせてWPSに関する企画を実施してきた。中国山西省の日本軍性暴力被害者家族の証言(2014年)、フィリピン・レイテ島の日本軍性暴力被害者を主題に映画を制作した竹見智恵子さんの講演とワークショップ(2015年)、「慰安婦」問題と現代の性暴力の連続性に関する作家川田文子さんの講演(2016年)、沖縄の米軍による性暴力と非軍事の安全保障の可能性に関する高里鈴代さんおよびメリ・ジョイスさんの講演(2017年)<sup>2</sup>、アルゼンチンの国家テロリズムへの対抗や「五月広場の母たち」など運動の担い手による国際シンポジウム(2018年)<sup>3</sup>を通じてWPSについて考える場を設けてきた。

2020年度は、UNSCR1325採択からの20年間を振り返る企画を検討していたが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により事前準備ができず、イベントの開催を断念した。代わりに推薦図書の本棚をオンライン上で「常設」する試みを実施した。

「慰安婦」について扱った本は、上智大学中央図書館にも多く配架されている。2021年3月現在、検索システムOPACでタイトルに「慰安婦」と入れると162件、キーワードに「慰安婦」を入れると210件が表示される。ほとんどは、歴史資料を用いた研究書や当事者の証言録だが、わずかながら歴史修正主義に与するような書籍も含まれている。出版社名や著者名から内容が推察できない学生が、何の手がかりもなしに本を選ぶのは困難である。また、インターネット書店や中古市場では、いわゆる「嫌韓本」に分類されるような立場から「慰安婦」を取り上げた本が安価で出回っており、それらを読んで課題を提出する学生もいる。そこで、本企画では、推薦図書リストと、学生による書評を、2021年3月8日

国際女性デーに公開した。

書評を書いたのは、2020年度秋学期の総合グローバル学部開講科目「国際協力論2（開発とジェンダー）」の履修生である。本科目の前半では、性の多様性、家族、教育、労働などの視点からジェンダーの基礎について学び、後半では、性別、人種、民族、障害の有無、宗教や言語等による立場の違いから生じる差異やニーズに配慮した開発や国際協力について考えることを目指す。平和構築以外に、人の移動や人身売買などについても学ぶ。

学生は、2020年11月19日にアクティブ・ミュージアム・女たちの戦争と平和資料館（wam）事務局長の山下芙美子さんによるゲスト講義「戦時性暴力：「慰安婦」問題をめぐる国際社会と日本」を聞いた上で、和書115点、DVD11点の計126点からひとり1点選び、400字程度の書評にまとめて提出した。履修登録者165人のうち136人が提出し、提出日にはオンライン上の小グループで「ビブリオ・バトル」（書評合戦）を行った。

提出された書評のうち53編をオンライン・ブックシェルフのページで紹介している。リストに掲載された126点のうち、2人以上の学生から選ばれた書籍もあれば、誰にも選ばれなかったものもある。学生の希望に従って、書評とともに所属学科や名前を記すか、無記名とした。学生は、研究書より当事者の手記や初学者向けの本を選ぶ傾向にあった。ひとりだけ、リストに掲載されておらず、図書館の蔵書にもない「慰安婦」の強制連行を否定する活動をしている著者の書籍を選んだ学生がいた。ただし、書評では「私は、強制連行の根拠はないからといって、慰安婦全員が強制されていなかったと結論付けるのは少し尚早ではないかと感じた。日本政府は、日韓合意によって完全に問題は解消されたとするだけでなく、真実を解明した上で、植民地支配の責任を果たしていく姿勢が求められるのではないかと書いていた。なぜ、あえてこの書籍を選んだのか学生本人に確認することができなかったが、それまでの講義で学んだことを踏まえて読んだことで、著者の主張に流されることはなかったと考えられる。

書籍は「日本軍性奴隷制度と沖縄」と「諸外国における戦時性暴力、女性・平和・安全保障研究」の二つに分類した。前者には、当事者の証言や聞き取りの他、日本軍側の資料、女性戦犯国際法廷に関するもの、研究者による検証、教科書やメディアの問題、支援／運動論などが含まれている。後者には、諸外国の戦時性暴力、沖縄などの外国駐留軍、女性戦闘員、女性・平和・安全保障に関するものが含まれている。リストの一部には、ノーベル平和賞を受賞したデニ・ムクウェゲ医師やナディア・ムラドさんなど紛争下の性暴力と闘う活動家の著書も入っている。他の「オンラインブックフェア」で用いた5つの指標（「最初的一步」「アカデミック」「変革への行動」「勇気がもらえる」「歴史・文学に学ぶ」）を「おすすめのポイント」としてつけた。

IGCのウェブサイトに掲載されている他のブック・フェアのリストと同様、この企画のリストや書評を活用して、学生には、これまで手にとったことがない本を読んでもらいたい。

田中 雅子（たなか まさこ）

グローバル・コンサーン研究所 所員／総合グローバル学部 教員

---

<sup>1</sup> 関連行事の一覧は UNWOMEN の Website のリンクから見るができる。

[https://docs.google.com/document/d/1vsEa9wi8a0MR9merqXIUD8juKbk9-788j9WKI7x4\\_Qw/edit](https://docs.google.com/document/d/1vsEa9wi8a0MR9merqXIUD8juKbk9-788j9WKI7x4_Qw/edit)(2021年3月3日閲覧)

<sup>2</sup> 田中雅子 (2018) 「セミナー報告「沖縄から考える非軍事の安全保障」」『グローバル・コンサーン』第1号、61-72頁。 [https://dept.sophia.ac.jp/is/igc/publications\\_gc3.php?n=1](https://dept.sophia.ac.jp/is/igc/publications_gc3.php?n=1)

<sup>3</sup> アクティブ・ミュージアム「女たちの戦争と平和資料館」(2020)『アルゼンチン 正義を求める闘いとその記録 性暴力を人道に対する犯罪として裁く！—2018年10月国際シンポジウムの記録』「戦争と性」編集室。